

2002年11月、私は1年ぶりにネパールを訪問し、1999年度のJICA博物館学セミナーにオブザーバーとして参加したガネッシュ・マン・グルンさんに会った。このエッセイでは彼が先導して計画してきた野外博物館、ネパール民族誌博物館設立に向けたその後の動向を報告する。

そもそも、私がネパール民族誌博物館管理委員会 Nepal National Ethnographic Museum Managment Committee (以下、管理委員会)とつながりをもつようになったのは1997年のことだった。それ以降、毎年私がネパールへ行くたびにグルンさんは会合を開いてくださり、日本大使館やJICAなどにも博物館設立の趣旨を説明しに一緒に行ったものだ。JICAの博物館学セミナー研修員として管理委員会の委員を呼ぶことも試みたが、博物館がまだ設立準備段階であることからできなかった。しかし、幸いなことに、グルンさんが国際交流基金の助成金で6カ月民博に滞在することになり、オブザーバーとしてセミナーに参加することができた。さらに、同じ年、ネパール国立博物館の学芸員であるバラット Bharat さんが研修員として参加していて、この二人が日本で出会ったことも幸運だった。というのも、管理委員会の委員は大学の人類学者が多く、博物館に勤める専門家とのつながりは十分とはいえなかったからである。

凸版プロジェクトとチャンパデヴィ Champadevi

1999年管理委員会と民博、凸版株式会社はビデオ機材一式を管理委員会に提供し、撮影したビデオを3者が自由に編集・使用する契約を結んだ。これが、研修員の何人かもそれぞれの国ですすめている凸版プロジェクトである。1999年12月、凸版株式会社の小林さんと私は、ビデオ機器の贈呈式のためにカトマンズを訪ねた。そして、私はこの時はじめて野外博物館の建設予定地、チャンパデヴィを視察した。しかし、私はそこに着くなり呆然としてしまった。なぜなら、そこはジープしか行けない未舗装の道路がかろうじて通じているカトマンズ盆地 kathmandu valley の山裾だったからだ。場所は野外博物館を建設するのに適しているとはいえよう。しかし、道路建設からはじめなければならない博物館設立計画は、私には夢か幻のように感じられた。

そこで、私はグルンさんに対して、ここ5年位で実現できそうなより現実味のある計画を提案した。それは、まず第一ステージとして、カトマンズの環状道路 ring road 内のどこかで、小さくても良いから旧貴族の屋敷を借りて博物館をスタートさせること、それが成功してから第二ステージとして野外博物館に展開することであった。グルンさんと副代表のゴウチャン Gaucan さんは、この突然の提案を前向きに検討してくださり、管理委員会の委員を説得したようだ。なぜなら、次の機会に私がネパールを訪問したときには、博物館の候補となる建物を一緒に見に行くプログラムが用意されていたからである。

ネパール・ツーリズム・ボードによるスペース提供

なかなか適当な古い屋敷は見つからなかったが、事態は思わぬ方向に好転した。2000年、Nepal Tourism Board が、Tourist Service Center の2階にある Ethnic Exhibition Hall (15m×15m、10m×15mの2部屋とテラス)に、展示を企画する団体を募集したのである。TSCは、"Visit Nepal 98"に合わせて新たに街の中心に建築された大きな、きれいな建物だ。NTBの所長によると、近く隣のビルに移転してくるイミグレーションに来る外国人が、待ち時間にちょっと立ち寄ってネパールの民族・

文化について学べる施設を作りたいとのことである。早速、管理委員会はそのスペースでの展示計画を企画立案し、NTB から承諾を得た。これで、ついに博物館をカトマンズ市内の一等地に開館する目途が立った。

また、同じ年、国際交流基金から博物館の建設に向けたプロジェクト「ネパールの人々とその文化の研究」に助成がつき、グルン、マガール Magar、シェルパ Sherpa、タカリー Thakali、タルー Tharu という5つの民族を対象とした研究がはじめられた。私はマガールという民族を研究してきたため、マガール部会に顔を出した。そこで、私は「調査する村の代表的な一世帯を取り上げ、その家にある全ての家財道具の写真を撮り、現地名を聞いてきて台帳を作ること、そして、その台帳（写真リスト）を見ながら何を収集・展示するべきかを皆で議論する」という方法を紹介した。

今回カトマンズを訪ねると、NTB での展示に向けた準備が着々と進んでいた。管理委員会では10の民族の民族協会から文化や伝統に関心の高い人2名を研究チーム委員として推薦してもらった。そして、この民族協会代表の2名を中心にして、自らの文化をどのような資料と展示構成で表現するのかを議論してもらった。さらに、展示で必要とされる資料の収集と、それらを管理委員会に寄付ないしは委託することを民族協会にお願いしてきた。こうして、グルン、チェパン Chepan、マガール、ネワールの農民カースト Jyapu Caste of Newar、ライ Rai、シェルパ、スヌワール Sunuwar、タカリー、タマン Tamang、タルーという10の民族の協力が得られ、資料がそろった。現在は、2003年2-3月の開館を目指して、民族協会の代表とボランティアによって展示施工が行われている段階である。こうして、8年来の博物館設立構想は、今年その第一段階が実現されようとしている。まずは、グルンさん、ゴウチャンさん、事務局のディタール Dhital さんに心からおめでとうといいたいと思う。

ネパールにおける博物館の将来性

この喜ばしい門出に、ネパールにおける博物館の将来性について、希望と勇気を与えてくれた一光景を紹介して終わりとしよう。それは、1999年12月28日午後4時50分のことだった。ハヌマン・ドカ博物館長 Hanuman Dokha と会って外に出た小林さんと私が目にしたのは、青いシャツにサンダル履きの約200人の生徒たちが一列になってUターンしている光景だった。引率の先生に聞くと、「ハヌマン・ドカ博物館はもう閉館時間で入れなかったのでチャウニーの国立博物館 The National Museum of Nepal, Chauri へ行ってみる。もし、そこも閉まっていたらバラジュ庭園 Balaju Water Garden に向かう。」というのである。列の後ろを付いていって見ると、ヴィシュヌマティ川 Vishnumati をわたった約2キロ先に2台のおんぼろバスが停まっていた。彼らはカトマンズからバスで1~2時間のカブレ・パランチョーク郡 Kabhre-palanchok district から来た日帰り修学旅行生で、5~7年生の児童たちだったのだ。カトマンズでは、朝からバクタプル Bhaktapur の3つの博物館（共通券で1人2ルピー）、パタン市 Patan、動物園、国会議事堂を訪ね、ラジオ・ネパール放送局は見学できずにハヌマン・ドカ博物館に来たようだ。ちなみに、パタン博物館は入場料が高いので見ていない。

ここからは、入場料が安い博物館はネパールの学校教育の一環として利用されるということ、博物館にとって駐車場は絶対条件ではないこと、先生に訪問先の情報が十分に伝わっていないことなどが見えてくる。小林さんと私は、民族誌博物館とは自国の児童がネパールの文化の多様性を体感するところだと考える。幸い、ネパール民族誌博物館の立地は、ネパール人にも外国人にもとても便利などころである。残るは、いかにして地方の学校の先生に、効果的な情報提供ができるかにかかっている。いいえ、その前にまず、ツアーリスト・サービス・センターの「ツアーリスト」にネパール人も含めて考えるという、発想の転換が必要であろう。リニューアルしたパタン博物館は入場料を高くしてターゲットをト

ウーリストに絞った。チャウニーの国立博物館は入場料が安いものの、いかにも古式蒼然とした博物館である。ネパール民族誌博物館は、ホテル並みにきれいな建物の中にあるメリットを活かして、子供たちが多少その雰囲気緊張しながらも、外国人と一緒に自分の国の文化を見つめ直す場であってほしいと思う。

最後に、もう一つおめでたい話がある。実は、2002年、憲法で規定されている公職委員会 **Public Service Commission** の委員（6名）の一人に、グルンさんが任命されたのだ。このポストは、大学院修了資格 **post graduate degree** をもち、科学、芸術、文学、法律などの研究、教育において高い評価を受けている者から任命されるもので、6年間は大学教授の兼業も許されない特別職である。私は、冗談に「グルンさんは大臣にでもなるのが、博物館を開館する最短路ではないか。」と言ったと書き、それがまんざら冗談とも言えないところがグルンさんの計り知れないタレントなのだ、と紹介した（Minami 2000）。私の予想は、大きくはずれてはいなかったようだ。多忙なポストだと思うが、博物館の開館とさらなる発展を目指して今後ともご尽力されることを願っている。

参考文献

Ganesh Man Gurung

- 1999 *Administration and Management: Establishing an Ethnographic Museum in Nepal*. (Report submitted to Japan Foundation)
- 1999 Ethnic Identity and Politics of Ethno-Museum in Nepal, Chhetri, R.B. and Gurung, O. P. eds. *Anthropology and Sociology of Nepal: Cultures, Societies, Ecology and Development*. SASON, pp.81-90.
- 2000 Establishing an Ethnographic Museum in Nepal, *Ethnographic Museum Bulletin* 1(1):6-8.
- 2001 Kingdom of Nepal, *Co-Operation Newsletter for the Minpaku Seminar on Museology 2001*. International Cooperation on Museology, National Museum of Ethnology, pp.18-19.

Makito Minami

- 2000 Dr. Ganesh Man Gurung. *Minpaku Tsushin* 87:62-63. (in Japanese)
- Nepal National Ethnographic Museum Management Committee
- 1996 *Souvenir of International Conference on Establishing a National Ethnographic Museum in Nepal Jan. 8-12. 1996*.
- 1997 *Proposal for Establishing Nepal National Ethnographic Museum: Preliminary Master Plan*.
- 2000 *Ethnographic Museum Bulletin* 1(1).

略史

- 1995 ネパール民族誌博物館管理委員会発足
- 1996 博物館設立に向けた国際会議開催
- 1999 Dr. Ganesh Man Gurung 来阪（国際交流基金招へいフェローシップ）
- 1999 ビデオ撮影（凸版プロジェクト）
- 2000 現地調査（国際交流基金グラント）
- 2001 Nepal Tourism Board との合意
- 2002 収集・展示
- 2003 博物館開館（予定）